

自分の言葉で伝えたい



三重歴教協津・松阪支部
三谷 陽平
(津市立栗葉小学校)

※レポートは前任校の松阪市立豊地小学校の実践

1. Aとの出会い

4年前、私が4年生を担当した時に会いました。特別支援学級在籍児童であるAとの会話は非常に難しく、特別支援学級の担任やアシスタントの先生を介しないとAの言っている内容は全くと言っていいほど理解できませんでした。授業のペアワークやグループワークの時、Aの周りの子の反応を見ていると、Aの言ったことを周りの子どもたちも分かっていない様子であり、支援の先生がAの言ったことを要約して伝えていました。Aも一生懸命参加しようとする姿が見られたのですが、「あ、あ、うー」といった、音としては発しているのですが、意味や言いたい内容が伝わらないことが多く、コミュニケーションに困難がありました。Aも自分の考えが周りに伝わらないことに苛立っていました。

2. 「周りに伝えるため」の試行錯誤の日々

5年生になり、特別支援学級の担任として、Aを受け持つことになりました。前年度を踏まえ、まず考えたことは「Aの言いたいことを周りの子どもたちに伝えるようにするにはどうすればよいか。」でした。そこで、私は、Aの母親に言語訓練はどんなことをしているのか、学校でできることはあるか相談をし、リハビリセンターでやっていることを教えてもらい実践してみました。

まず、行ったことは絵本を音読することでした。Aの母親から借りた「おむすびころりん」の絵本を授業の中に取り入れ、一音ずつ読む練習を始めました。読む練習と並行し、自分の考えを伝える手段が多い方がよいだろうと考え、前担任から引き継いだA4サイズの50音表をラミネートしたものを使って一文字ずつ指差しして考えを伝える練習も取り組みました。

それだけでなく、学校にあるタブレットパソコンを使ったり、母親から借りたペチャラ（携帯型会話補助機）を使ったり、考えられることはどんどん試してみました。

50音表のラミネートは、手軽に持ち歩けるので学校内だけではなく、遠足や社会見学など学校外で重宝しました。

タブレットパソコンでは、キーを打って文字に起こし、考えを伝えるようにする練習に取り組みました、キーの小ささに苦戦をしていたので、ipadのような平面のタブレットを使うと押さえやすくなるだろうと考え練習してみました。しかし、押さえようとしても平面なので指が滑り、思っているところとは違う文字が出てしまい、スムーズなコミュニケーションには繋がりませんでした。

ペチャラは、キーボードの部分が押さえやすいように穴が開いており、指が滑らず、確実にキーを押せることができました。また、音声読み上げ機能があり、周囲の人にも伝えることができました。スムーズに使えるようになるには、時間がかかりましたが、Aの考えはペチャラを通じて理解することができました。しかし、バッテリーが切れると全く使えなくなることやAが一人で持ち運ぶには不便さを感じ、実用性に欠けると感じました。



3. 自分の言葉で伝えたい

Aの様子を見ていくと会話の始まりは補助器具を使わず、必ず言葉を発していました。言いたいことを一生懸命言って伝えようとし、伝わらなかった時の最終手段で補助器具を使っていることに気付きました。そこで、Aと話をしたところ、「僕は、自分の言葉でみんなに伝えたいんだ。」と教えてくれました。Aの「自分の言葉で伝えたい」という強い思いを感じたので、これからは「喋る」ことに重点をおいて一緒にトレーニングをしていこうとAと話しました。

練習を重ねる中で苦手な音（サ行、タ行、パ行）が分かり、一音、一音ははっきり言えるように何度も繰り返し練習を続けました。サ行、タ行を発音するときは、口の中で舌が動き、特にサ行は、舌先を微妙にコントロールする必要があります。そのために、舌を上手に動かせるように「あっかんべー」と下の出し入れをしたり、一定時間舌を出し続けたりして舌のトレーニングをしました。また、パ行を発音するときは、一度しっかり唇を閉じて、母音の口の形をはっきりさせて言わないと発音できないので、「ア、イ、ウ、エ、オ」と口の形を意識して言う練習をしました。

基本的に音読は毎日続け、1、2か月経ったころから、たどたどしかった絵本の読みが少しずつスムーズになってきました。半年が経つ頃には、ペチャラなどの補助器具が無くても、Aの話していることが聞き取れるようになってきました。私や毎日接している生活アシスタントの先生には伝わっていましたが、子ども同士の会話では、まだ伝わらない部分が多くありました。

周りの友達や第3者にAの言った内容が伝わるまで約1年かかりました。

4. 体をほぐす

Aは筋肉がこわばったり、腕や体が突っ張ったり、手や足の麻痺が強く、話そうとすると、予期せぬ体の動きが起こることが分かりました。スムーズに話すことができない原因となり得るものがここにもあったので、リハビリセンターの先生に相談したところ「言葉を発する時の姿勢」が大切になると教えてもらいました。その姿勢を保つためのストレッチや体幹を鍛えるトレーニングを教えてもらい学校でも取り入れるようにしました。毎朝、体をほぐすストレッチを続け、授業時には、プロンボードに立ち、まっすぐな姿勢を作ってから音読をしました。



5. その後

1年が経つ頃には、普段接する機会の少ない、校長、教頭とも会話ができるようになり、6年生の冬に行われた人権フォーラムでは、初めて会うグループの中学生にAの言ったことが伝わるといふ出来事がありました。その出来事がAにとって大きな喜びと自信になり、2年間「自分の言葉で伝えたい」思いを持ち続けて頑張ってきたことが実を結ぶことになりました。

6. 交流学級での様子

私が担任をしていた4年生の時、Aは、食べたり、喋ったりすると涎が出てしまうので、周りの子はそれを受け止めきれず困惑している様子が見られました。席替えをした時、Aが隣になると、スッと机を離し距離を取る児童や自由に動き回る活動をするAに近づこうとしない児童もいました。

自分の言いたいことが相手にしっかり伝えられることができなかつたので、Aはもどかしくなり、泣いてしまったり、怒って机を叩いたり感情的になることが多く、周りの児童も積極的に関わろうとする児童は少なかったです。隔たりが少しでも無くなればと思い、「みんな遊び」をしようと提案しました。学級会で何をするか話し合った時、大多数の児童がやりたいこととAのやりたいことが違ったことがありました。Aがやりたいことは次回やろうという流れになったのですが、Aは自分のやりたいことを押し通して曲げようとしませんでした。中には「Aのわがままだ。」と言う子もあり、「A君の意見だけが通っていくのはおかしいと思う。」と意見も出ました。A対A以外の子という状況になってしまいました。しかし、Aはみんなで遊びたいと思っていたのに、その場で上手く伝えきれず、周りから見るとわがままに見られてしまったことがありました。この出来事で、Aとみんなの距離をさらに広げてしまいたくなかつたので、一度みんなに向けて話をしたことがありました。「最近先生、悩んでいるんさ。みんなとA君の間に距離があるように感じる。でも、誰も悪くないんさ。なのに、距離があるように感じる。だから、どうしたらいいか悩んでる。」と問いかけるように話すと考え込む子。深刻そうな顔をする子。色々な表情を見せました。その後、休み時間に関わろうとする児童は少しずつ増えましたが、みんなが関わられたか、というところではありませんでした。

1) 家族の思い・その思いを聞いて

Aの祖母が前校長に宛てた手紙が残されています。これまでAの生い立ちにふれることは、なんとなく「タブー視」してきたのですが、あらためて読むと、本人にとっても、みんなにとっても、Aがこの学校にいて良かったと思えるような学校づくりを切に願っているように読み取れました。

学校で子ども達に「どうして？A君まだ歩くことできないの？」「自分たちと同じことできないの？」と問われたことがあり、応答に悩みましたが、小さい頃は「どうしてかな？」「不思議だね」等と答えておりましたが、今後ははっきりと「産まれた時、病院で事故にあいました」と答えるつもりです。健康で産まれた子ども達には「命の大切さ」、両親に「産んでくれてありがとう」の言える子どもに育てて欲しい、Aを見て何か一つでも学び優しい心が芽生えてくれれば普通学級で共に学び共に助け合うことができれば意味があると思います。

私たち家族はAのおかげでたくさんの人たちの優しさにふれ、人として思いやる心を教えられ知識が豊かになりました。
(平成27年2月9日Aさんの祖母の手紙より抜粋)

5年生の「ひとの誕生」学習では、なかなかふみきれなかったAの誕生学習でしたが、お母さんに「もっとクラスにいる障がい者のことを考えて」と訴えられたことを契機に、Aの誕生の話をさせていただきました。Aの出産は壮絶なものでAは6分間も呼吸が止まった状態の中、必死に「命をつないできた」「この子には生きる力があつた」と話されました。そして幼稚園卒園のあと「みんなといっしょの学校に行きたい」と大泣きし、その時はこれからの6年間を思って「地獄のような苦しみ」だったそうです。そして祖母の手紙と同じように「みんなには優しい心を持って欲しい」「命を大切にしていってほしい」と話を終えられました。

その話の中で、障がいを持った保護者達が松阪市に「機能訓練センター」のようなものを作る為に署名を集め活動したこと。今その施設（育ちの丘）ができてAがリハビリをがんばっていることも話していただき、交流学級の児童は興味を持つことができました。（この話を受けて、1月末には育ちの丘への社会見学へ行きました。）

この話を聞いた交流学級児童は、すぐその日のうちに手紙（感想）を書きました。

A君のお母さん、A君の話をしてくれてうれしかったです。A君のお母さんは、とてもつらかったと思いました。でも、A君を産んでくれたおかげで、6年生は優しいクラスで、みんなが信頼できるクラスになりました。A君がいてこそ6年生だと思いました。

ぼくは中学校のA君といっしょに行きたいです。そしてA君ができないことは、ぼくたちがやりたいと、ぼくは今日、それを強く思いました。A君は、ぼくにとって、この6年生にとって、なくてはならない大切な友だちです。

2) クラスを見つめ直して

「AさんやAさんの家族がそこまでの思いを持って入学したこの学校・クラスが本当にAさんにとって居心地のよいクラスになっているか」「Aさんに何ができるのか」・・・人権集会で「6年生のクラス」を発表すると決めてから、みんなで話し合いました。「Aさんができないことはみんながやればいい。同じように困っている子がいたら、みんなが手を差し出すことができたらいい。」「こんなふうに、みんなが優しくなろうと話し合えるのはA君がいてくれるおかげ」と話し合い、Aの家族にあてた手紙や話し合った内容から、セリフをつくり劇を考えることができました。

人権集会の練習が始まると、「劇では、みんな大きな声であいさつするのに実際はどうなんだ?」「A君がいてくれるから優しいってホント?」と声をかけあうことが多くなりました。

3) 「ぼくたちのクラスはA君がいてくれたから思いやりのある優しいクラスになっているんだ。」

人権集会の劇を、Aの家族は涙ぐんで見てくれたそうです。本当に、このセリフ通りのクラスになっているのだろうか・・・。みんなは確かにAのことを気遣えるようになりました。おまけに、困っている子によく声をかけることができたり、誰かがいないときには、その子の文具を出したりしまったり、「こうしたらいい」ということを傷つけないように伝えたりすることができるようになっていました。

A自身は、だんだんと「みんなとの距離」を感じているようで、自分からどんどん加わっていた

ドッジボールにも参加しないようになり、それよりはブランコで遊ぶことが多くなってきました。運動面では、自分に何ができるかできないか感じているように思われました。しかし「みんなと一緒に学ぼう」という意欲は高く、後期、放送委員会の委員長になるなど意欲的でした。言葉もずいぶん多く発して、交流学級の人々にもだいたいということが聞き取れるようになりました。持久走大会の詩を学級通信に載せたとき、みんなと同じように前に出て（通信に名前がのった子は前に出て読むことになっている）、それまでは支援の先生達が代わりに読んでいたのが、「自分で読む」と言い、長い詩だったが時間をかけて読み、みんなもそれをじっと聞き拍手していました。いろいろな子がいるクラスではありますが、自分たちのクラスを見直し、一人一人のいいところを見つめることができ、同じ時間を過ごせているように感じました。

7. おわりに

4年前、Aとクラスの人々の距離を感じた時に足りなかったことは、もっと本人の思いや家族の思い、願いを知り、それを保護者と共有すること。そして、その思いをクラスの子どもたちに伝えていくことが必要だったと気付くことができました。とりわけ、親の思いに自分自身が気付かされ学ぶことが多かったです。

Aは特別支援学校に進学しました。卒業を前にA自身は、みんなとは違う学校に進学することを不安に感じているようでした。進学してからは、学期に一回程度のペースで、Aとみんなの交流は続き、同じ教室で学習したり、レクリエーションをしたりしているそうです。

<メモ欄>